うにおもった。

二　ヴァシリー・ミハイロヴィチ・タラソノフ著『古代諸民族の治療の反映としての医学の象徴』（一九八五年）。医学の紋章の歴史的背景をさぐっている本で、A五判一一九ページ。現在のイランで発見されルーヴル博物館に蔵されているグデアの酒盃（ラガシの王グデアが治療神ニンギシジダにささげた）について、まずくわしく論じている。この酒盃には二匹の蛇がからみついた木（カデュセウス）がほられている（現在カデュセウスはヘルメスの杖で、医学の紋章とは別物とされている）。蛇は天と地とをつなぐもの、水をもたらすもので、実り、豊かさ、生と死、よみがえりなどを象徴する。こういう広義において、グデアの酒盃におけるカデュセウスは医学を象徴していた。こののち蛇には知恵、商才などの意味もくわわり、その面をとりだしたのがヘルメスの杖である。アスクレピオスの杖では、自然の治癒力の一部分としてあったものが治療技術として人間のものとなったことがしめされている。このあとも医学の象徴はいくつか提示されたが、技術化の段階をしめすものとして、アスクレピオスの杖が医学の象徴としてもっともふさわしい。

タラソノフの本はこのように、古代文明史、民俗学、宗教学などのひろい成果にたって医学の象徴を論じている。時あたかも巳年、憑きもの関係でも蛇の問題はおおきい。タラソノフの本は翻訳したいぐらいにおもしろいが、関連事項がひろすぎて手におえないが、なんらかの形でくわしく紹介したい。

（平成元年一月例会）

旧約聖書の医学用語について

梶田　昭

分節化と名づけは、人間が対象を理解する基本の方法である。体の内景の区切り、名づけが解剖学、病気の区切り、名づけが疾病学（ノソグラフィー）である。諸民族は、それぞれの分節・名づけの体系をその言語としてもっている。（拙稿「記号論としての病理学」『東女医大誌』五七巻、一四一五頁、一九八七）。

旧約聖書はセム系言語で書かれた。医学用語もヘブライ人の思考様式を反映したものであったろう。ギリシア語、ラテン語をはじめ、近代の世界諸語に訳されて行ったとき、そのつど異種の分節体系に遭遇し、言葉の移しかえはコノテーションの移動を伴ったはずである。

レビ記三章四節他の「肝臓の尾状葉」（新共同訳）、申命記二八章二七節の「壊血病」（口語訳）、サムエル記上五～六章にいう「アシドド人の腫物」、レビ記十三章の「らい病」を例にとって論じた。

（平成元年二月例会）

奈良時代の医療の実態

杉田　暉道

奈良時代は仏教文化がおおいに栄えたので、これに伴いわが国

の医学も著しく進歩し、従来からの加持祈禱のほかに薬物療法も行われ、科学としての医学の第一歩をふみ出した時代ともいわれている。しかしこれについてはもう一度見直す必要があると思われる。

まず、仏教のわが国への伝来について検討してみよう。かつてガンジス河流域の農耕社会のなかで、自由、平等、慈悲の根本原理に基づいて人間の精神的苦しみを救おうとブッタが開いた仏教は、その後、自分が精神的に救われるには、まず他人を精神的に救わねばいけないという大乗仏教の思想がおこり、これが中央アジアをへて中国に入った。ところが中国に伝わった仏教は、その国の帝王、君主の国師という形に変っていた。すなわち僧侶たちは、晋、六朝時代を通じて、各地に散在した王候のために富国強兵策を新来の知識技術を用いて指導したのである。かれらは、仏教の学者、宗教家というより、東アジア圏での博物学的知識のにない手であった。文化的価値体系やその能力の差がはげしければはげしいほど、その流通伝播の形体は即物的になる。聖明王のもたらした仏教、仏像は、まさにそうした東アジア圏の百科全書的知識の運搬物であった。それをもっともよく知っていたのが蘇我氏であったといえよう。当時の大和民族は、仏教のもたらした難解な経文よりもエキゾチックな仏像、仏像をつくるに必要な技術、経文の装飾に使われる軸木や帙の形式、さらに実生活に役立つ実利大系、建築技術、天文歴法、医薬知識からはじまって、仏教音楽、衣装のたぐいのすばらしい魅力にすっかりとりつかれたのは当然であった。

仏教の公伝は紀元五三八年であるが、それ以前に朝鮮三国からの渡来人によって仏教が伝えられていたことは多くの研究者に認められている。しかして「飛鳥、白鳳時代の仏教家界の指導者は朝鮮からの渡来人か、渡来系出身者が大部分である」。また「飛鳥寺、または法隆寺などで中心的指導を果していたのは、百済や高句麗の僧侶だった」。さらに今でも経文を呉音（百済音）で読んでいる事実などを指摘した仏教史家田村円澄氏の説や、「当時の仏像製作者は、ほとんどは中国および朝鮮からの帰化人ないし帰化人の子孫であった」と美術史家久野健氏は断定し、門脇禎氏等は蘇我氏を百済渡来人と唱えているのをみると、「飛鳥仏教は、渡来人集団の高度な思想や技術を背景にしてはじめて成立し得たことは明らかである。いわゆる飛鳥仏教文化は、日本人みずからの文化というよりも、渡来人の手によって日本の国土に開化した文化であった」（速水有氏）ということができる。

奈良仏教になると国家仏教の色彩がはっきりとし、僧尼に対する国家の保護と統制が強く現われてくる。中国や朝鮮からの渡来僧は前述のごとく医薬についての最新知識を持っていたが、これは当時の病魔にはまったく効果がなく、呪術儀礼の中で上手に視聴覚に訴える方法をとらざるを得なかった。したがって為政者の要請に応じて、造寺造仏の技術指導から始まり、造仏、開眼供養の儀礼奉仕や、写経、経典転読がおおいに行われたのである。さらに奈良時代に活躍した僧侶、義淵、行基、良弁および大仏鋳造の指導者であった国中公麻呂は百済渡来人であることは注目すべきである。井上光貞氏が「奈良時代は勿論平安時代の初期にかけ

ても、仏教史上注目すべき人物には帰化人が多い」と述べているのは当然のことである。

奈良時代の医療を代表する人に鑑真があげられる。彼の来日後の仕事は『続日本記』によれば、一つは経論の校正、二は薬物の可否真偽の判別を鼻でかぎわける、三は皇太后（元正）の病気を治したことであった。彼は失明しており、弟子たちの間には複雑な反目と軋轢とがあり、僧侶社会で、競争暗闘などのために彼の治療の恩恵に浴した人はそんなに多くなかったと推察される。ついで正倉院の薬物について検討しよう。土肥慶蔵氏によれば「中国での薬物の内服の主目的は長生と性欲の保存にあって、疾病の治療はそれほど重視されなかった」と述べ、清水藤太郎氏は、正倉院薬物を古方薬品、東南アジアに産する薬物などに分類し、現在でも貴重な漢薬とされているものがあると述べている。これらをまとめると正倉院薬物の過半数は栄養剤、精力剤であることがわかる。（杉山二郎氏）。

皇室関係者の治療を『続日本紀』について検討すると、ほとんどは天下に大赦し、天下に放生を行い、僧尼の得度を行っている。さらに写経、転経、仏像の製作を行うという方法をとっている。百方療治または湯薬を用うと記載されているのは数人に過ぎない。

以上のことをまとめると、医療にくわしかったのは中国または朝鮮渡来の僧侶であったが、多くの病気には期待すべき効果が得られなかったので、上流社会においても加持祈禱、写経、などが重視された。したがって、一般国民はさらに低級な呪術に頼ったのは当然であった。

（平成元年三月例会）

明治初期静岡県の病理解剖について

土屋　重朗

明治十五年より明治二十二年まで、静岡函右新聞と静岡大務新聞の両地方紙にときどき連載された「病体解剖記事」は、両紙共載のものを一件とみなしても合計八件に及んでいる。

内容は大へん詳しいものが多く、おそらく解剖実施者が書いた報告書を、新聞記者が何らかの方法で入手して新聞にそのまま発表したと思われる。正確で詳しく、医師でなければ書けない内容であるからである。

静岡県の解剖は、明治十三年と十四年に静岡と浜松で各一例ずつ刑死した者を一般系統解剖として一般医師に供覧しているので、これらを含めると二十二年までの被剖検者は十名に及んでいる。

病理解剖が、わが国ではじめて行われたのは「東京大学医学部百年史」によると、明治六年二月とあり、同部では明治十年より病理総論、同十二年より病理学各論が講じられ、十六年には病理学総論および病理解剖が独立した科目となったという。

したがって静岡県における病理解剖は医学校もなく、病院だけで行われた事を考えると、その実施は極めて早期で症例も多い。解剖執刀指揮者は東京大学医学部またはその前身者が多い。

明治二十二年をすぎると、病理解剖の新聞記事はほとんど見当